仙台北三番丁教会
2023年9月3日 三位一体後第13主日

安心してください

仙台宮城野教会牧師 齋藤 朗子

聖書　マタイによる福音書14章22～36節
22 それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させら
れた。23 群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにお
られた。24ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。25夜が
明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。26 弟子たちは、イエスが湖上を歩いてお
られるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。27 イエスはすぐ彼らに話しかけら
れた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」28 すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わた
しに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」29 イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロ
は舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。30 しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたの
で、「主よ、助けてください」と叫んだ。31 イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑った
のか」と言われた。32 そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。33 舟の中にいた人たちは、「本当に、あ
なたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。
34 こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いた。35 土地の人々は、イエスだと知って、付近にくま
なく触れ回った。それで、人々は病人を皆イエスのところに連れて来て、36 その服のすそにでも触れさせてほ
しいと願った。触れた者は皆いやされた。

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

---

8 月に、車に乗っていて小さな事故を起こしてしまいました。

祈祷会が終わって、お昼を食べようと思ってラーメン屋さんに行きました。お店には広い駐車場があり、ひとつの駐車スペースにバックで駐車しようとしていたところ、私の車のすぐ後ろに駐車場に入って来ていた車がいることに気が付かず、私の車の後ろと、相手の車の前の部分がぶつかってしまいました。

命にかかわる大けがをするとか、車が大破するということではなかったのですが、自分が誰かの車にぶつけてしまうことが初めてだったので、ショックで動機が激しくなって頭が呆然としかけていましたが、必死に冷静でいようとつとめながら、すぐに警察を呼びました。ほどなくして警察が到着して、警官に問われるがまま、その時の状況を伝えたのですが、私が警官に話している時に、相手の方が「たぶんこの人（私のこと）は嘘を言っている!」と、もう一人いた別の警察官に言うのが聞こえてきました。私はできるかぎり、記憶をたどりながら思い出したことを話していただけなのですが、「嘘つき」呼ばわりされてしまったことで、血の気が引くようなショックを感じました。けれども、私が記憶していること、私の目で見ていたこと、私がこうだったと思って居ることと、相手のそれとは違っているのかも知れない、いや、そもそも互いに違う視界が目に入っていたし、違う感覚を持っているのだから、当時の状況に双方に少し食い違いが生じるのもやむを得ないと思い直して、とにかく冷静でいようと必死でその場を対処し、最後は相手方に私の不注意をあやまって別れました。

結局は、食欲は吹っ飛んでしまい、ご飯は食べずに恐る恐る運転しながら自宅へ戻りましたが、家に戻ってからも心臓がどきどきして、気持ちが沈んでしまいました。こういう状況で、今日の聖書箇所を読んでみたところ、なんだ、私は 30 節に書かれている、風を見て怖くなって沈みかけたペトロとまるで同じじゃないかと思

いました。

イエス様の弟子たちのうち、ペトロがたくさんの人たちに親近感が持たれているのは、彼がふだんの私たちと同じように、時に得意になったり慢心したりし、時に落ち込んだりする、行動力はあっても軽率さもある、そしてなにより、主イエスに絶対的な信頼を寄せきれずに、何か事が起きるとジタバタしてしまう、そんな姿をさらけ出してくれているからだと思いますが、そういうペテロの様子を読んで「ペテロってなんか親近感わくなあ、ホッとしちゃうなあ」と思っている時の自分は、とりたてて何事もなく過ごしている時の自分であって、今回は車同士の接触事故でしたけど、たとえばこんな事故が起きたとたん、そんな呑気なことを言える気持ちは吹っ飛んでしまって、わたし自身がペトロになってしまうんですね。

そんな私（あるいは私たち）を、イエス様はいつも変わらず受け入れてくださっています。
「いつも変わらずにいてくれる」ということは、ものすごいことです。

イエス様が湖の上を歩かれた出来事が起きた時、イエス様の心の中には、大きな悲しみの感情があったのではないかと思います。それは、洗礼者ヨハネの死です。14 章の初めで、洗礼者ヨハネが領主のヘロデに首をはねられて死んでしまいました。イエス様はこのニュースを聞くやいなや、独り寂しい所に退かれました。きっと、ヨハネの死を悲しみ、父なる神様に祈るために、おひとりになられたのでしょう。けれども、大勢の人々が、ほうぼうの町からイエス様のもとに押し寄せてきました。しかし、こんな時なのに、イエス様は「私はいま、独りでいたいのだ、今日は私を放っておいてくれ、みんな家に帰ってくれ」とは言わないのです。それどころか、たくさんの病人を癒されて、夕方になったらこんどは食事まで取らせてくださいました。もし愛する人が死んで、悲しみのどん底にいるとき、私たちイエス様のようでいられますか？

このとき食事をしたのが、成人男性だけで5千人だったとありますので、女性と子どもを合わせたら1万人くらいは集まっていたんじゃないでしょうか。本当は独り静かにいたいし、泣きたいし、祈りたい。けれども、やっぱり目の前の病気の人のことは癒してあげたい。1万人の空腹を満たしてあげたい。イエス様のお心の中には、この時だけではなく、いつも悲しみも、やるせなさも、怒りも、失望感も、それはいろんな思いがおありだったと思いますが、それでも、人々に対して「変わらずに」愛と憐れみを注いでくださる。どんな時も、私たちへの態度は変わらない。父なる神と一つとなって、神の愛に満たされたイエス様は安定していて、私たちを受け入れてくださるのです。何かに怯えたり、不安でしかたなくてジタバタしている私たちに「安心しなさい。私だ。」と言って、そばに来て、手を伸ばして私たちを捕まえてくださるのです。

弟子たちは最初、湖の上を歩いているイエス様を「幽霊だ」と思って怖くなりました。それでも、安心したい一心で、ペトロは湖の上を歩き始めて、「来なさい」と言われたイエス様の元へ行こうとします。何か不安になる出来事があって、祈り始めるときの私たちの姿と、湖の上をイエス様に向かって歩き始めるペトロが重なります。ところが、風を見てペトロは怖くなり、沈みかけます。これも、祈り始めてもなお不安や恐れや、嫌な記憶や負の感情など、いろんなものが沸いてきてしまう私たちの姿だと思います。事故を起こした日の残りの数時間の間、私の心もこのような状態でした。浮いては沈み、沈んでは浮く、という感じです。

そんな状態から、やがて「イエス様が沈みかけた私を捕まえてくださっている」と、聖霊が私たちに確信を持たせてくださって、初めてホっとできます。そんな自分は、やっぱり信仰が薄いな、どうしてもっとイエス様に信頼して、ジタバタせずに平安でいられなかったんだろう、後になってからそう思って、神様に、自分の信頼のなさをあやまります。わたしたちは、大なり小なり、そんなところがある存在なのではないでしょうか。よく「困ったときの神頼み」と言いますけれど、本当に辛い時や困った時にこそ神に信頼できるなら、それが「信仰」というものでしょう。ところが私たちは意外と、「安心しなさい、私だ」と言って沈みかけたところから引き揚げてくださるイエス様への信頼を失って、ひとりジタバタしてしまったり、神様よりも人や物にすがったりしてしまう存在なのではないでしょうか。先日の事故の時は私がそうでしたけど、他にも、たとえば病気のときなども、このような経験をすることがあるかもしれません。

さて、いわゆる5千人の給食の出来事の直後に、イエス様は舟に乗る時に、「弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられてから、祈るために一人山に登られ、しばらく一人の時間を持たれました。ヨハネの死を知った心を抱えたままだったので、イエス様は人間として体も心もいっぱいいっぱいだったのかも知れません。この後で湖の上を歩く出来事があり、そしてイエス様と弟子たちが乗った舟が着いたところの土地に入ると、そこでも、イエス様が来たと知った土地の人々が、病人を皆イエス様のところに連れて集まってきました。

イエス様はマルコ福音書には、イエス様が来たと知った人々が、その地方全体を走り回って、病人を床に載せて、イエス様のところへ運んだと書かれています。そうして、村でも町でも里でも、イエス様が行かれたところの広場に病人を寝かせて、せめてお着物の裾にでも触らせて欲しいと願い、触れた人たちはみんな癒されました。迷いなくイエス様に信頼を寄せる人々の姿がここにはあります。そしてここにも、イエス様の、変わらぬ愛と憐れみがありました。

私たちも、何か病気になったり、障害を負ったり、体の不具合や弱まりを感じたときには、癒しを求めて、神に祈ります。ところが、このようなとき、私たちは今日の 36 節のような言葉を、つまり「触れた者は皆、癒された」といった言葉を、どう読んで受け止めるか、どう理解するか、ということが、ひとつ課題として浮かび上がってきます。あるいは、私たちの中にこのような疑問が沸いてきます。「どうして、私は病気になったのだろう」「どうして私の病気・障害は、癒されないのだろう」。そして、私たちの心は、神への信頼と疑いの間を行き来するのです。

このことで私が思い出すのは、前任地の教会を会場にして、月一回開かれていた「がん哲学外来メディカルカフェ」のことです。これは、順天堂大学医学部の教授で、病理学、腫瘍学を専門としている樋野興夫さんという医学博士が提唱・実践し、その活動の賛同者によって全国で開かれている、がん当事者や家族が安心して気持ちを吐き出せるカフェです。そこでは、がんという病を受け入れて、がんと共に生き、「どうして私が」「なぜがんに」という過去ではなく、「いかに生きるか」「いかに死ぬか」未来を見ながら歩んでいる当事者の方々の姿がありました。

もちろん、時には、この先どんな治療を選択するのがよいか、とか、転移や再発したらどうしようという悩みや不安はみなさん持っておられましたし、実際に痛みや治療の副作用、生活上の困難に苦しんでいる方もいらっしゃいました。そういう不安や悩みも決して否定せずに、参加者全員で共感をもって聞き、「にもかかわらず」人生を肯定的にとらえて、「いい覚悟」を持って、いかに生きるかを真剣に模索している姿に、私はいつも励まされていました。このカフェを教会でも開こう！と提案して、率先して実行してくれた、前任地の教会の教会員の方は、カフェが始まった翌年に、天に召されました。この方は、いつも祈り、いつも賛美し、できるかぎりみ言葉を読んで味わい、礼拝にもぎりぎりまで出席されて、いつもイエス様のもとへ近づいていかれました。欠点もあり、時々はカフェの仲間と喧嘩もする人でしたけれど、そんなところも含めて周囲の仲間に愛された方で、今でもときどき懐かしく思い出す方の一人ですが、この方には、がんの奇蹟的な癒しは起きませんでした。

聖書に戻ります。ペトロは恐れを解消するためにイエス様の元へ行こうとして、湖の上を歩きだしました。このこと自体も「奇跡」と呼べると思いますが、風は相変わらず吹いていたので、急に怖くなったペトロは沈みかけました。そこへ、イエス様が手を差し伸べてくださいました。

同じ湖の上で起きた別の奇蹟で、イエス様が舟を揺らす嵐を鎮めたことがありました。この時は嵐を止められたのであって、弟子たちの手を握ったり声をかけたりして安心させたのとは違い、イエス様は寝ていました。

イエス様がやってきたゲネサレト地方では、イエス様は多くの病人を癒されました。

使徒パウロは、自分の病か、あるいは障害の癒しを神に祈り、「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さ

の中で完全に現れるのだ」という答えが与えられました。

聖書を読むと、「奇跡」は起きたり起きなかったりします。主なる神様は、私たち一人一人の抱えている、病をはじめとするあらゆる困難や不安、恐れに対して、さまざまな仕方で応じてくださるからです。それによって、私たちが神の愛で満たされるために、そして、神への信頼が深まるためにです。私たちの祈り願いに対する答えがいかなる仕方で現わされるかは、私たちには決めることはできません。この点で、私たちは湖に沈みかけたペトロのような思いを抱くことがあるかもしれません。

けれども、「安心しなさい、私だ」と言ってくださる主は、いついかなる時も私たちと共におられます。これは、目に見える奇蹟や癒しが起きても起きなくても、決して変わらない事実です。神が共におられる、インマヌエルの主、イエス・キリストが、永遠に変わらぬ愛をもって私たちと共にいて下さる。これこそが、すべてのキリスト者に与えられている「信仰」への報いなのです。

祈り